

三国志独学ガイド

―正史三国志のつぎに読む本―

はじめに

第一章 赤壁の戦い(上) 陳寿『三国志』武帝紀	6
第二章 赤壁の戦い(下) 司馬光『資治通鑑考異』	22
第三章 ふたつの荀彧伝(上) 『全訳後漢書』の使用法	41
第四章 ふたつの荀彧伝(中) 荀彧の婚姻と死	57
第五章 ふたつの荀彧伝(下) 潘眉の説と関連論文	74
第六章 『三国志集解』諸葛亮伝(上) 諸葛玄の任命者	88
第七章 『三国志集解』諸葛亮伝(中) 盧弼注を読む(一)	107
第八章 『三国志集解』諸葛亮伝(下) 盧弼注を読む(二)	124
第九章 三国志の論文を読む(上) 論文への道程	145
第十章 三国志の論文を読む(中) 孫呉政権の形成(一)	161
第十一章 三国志の論文を読む(下) 孫呉政権の形成(二)	173
おわりに 三国志の論文を書いてみよう	189
付録一 司馬光『資治通鑑考異』日本語訳	194
付録二 講演録「私はなぜ三国志を研究するに至ったか？」	214

はじめに

この本は、**歴史として三国志を、独学するためのガイド**です。

小説や漫画、ゲームや映像作品など、三国志に興味を持つ入口は、広く開かれています。

三国志の魅力のひとつは、**歴史にルーツがある**、ということでしょう。さまざまな作品に触れたあと、「三国志の歴史を勉強してみたい」と感じるのは、自然な流れではないでしょうか。

しかし意外なことに、**歴史として三国志を学ぶ方法は、あまり公開されていません。**

大学で、中国史に限らず、歴史学を専攻したことがある人は、自分なりの方法を定め、勉強を始められるでしょう。しかし、大学で専攻しなかった場合、**何から手を付けたらよいか分からない**、というのが、正直なところだと思います。

「書店に並んでいる、めぼしい本(一般書)は、あらかじめ読んでしまった。だが、もっと歴史としての三国志を知りたい。インターネットで得られる情報は、何が信頼できるのか分からず、混乱するばかり……」
そういう方々に向けて、本書を作りました。

歴史として三国志を学ぶならば、**西晋の陳寿(三世紀のひと)が編集した『三国志』**という歴史書を読むことになります。

陳寿『三国志』は、入口として最適であるだけでなく、これを読みこなす

ことが、最終的な目標ともなりません。

陳寿に始まり、陳寿に終わる。

これが、三国志の学びのプロセスです。

プロの研究者だつて、三国志（三国時代）を題材として論文を書くとき、陳寿『三国志』を必ず読みます。

しかし、突然、「中国の歴史書を読みましょう」というのも、皆さんにとって、無理な注文に違いありません。

歴史書とは何か、歴史書とはどのようにして読むのか、といった予備知識が必要です。 歴史書と付き合う方法を、丁寧にひも解くことが、この本の使命です。

陳寿『三国志』は、漢文で書かれています。ですが、

「三国志の勉強には、漢文の読解スキルが必要不可欠である」と決めつけては、**ハードルを上げすぎ**だと思います。中学・高校の授業を通じて、漢文を読めるようになる人は、きわめて少数でしょう。誤解を恐れずに、宣言します。

漢文が読めなくても、三国志の勉強はできます。

日本人は、数百年にわたって三国志を、受容してきました。さまざまな機会を通じて、三国志を鑑賞し、学習してきました。優れた翻訳や、その手掛かりとなる解説書は、たくさんあります。すでに出版されている日本語の著作を活用し、勉強の方法を探りましょう。

ある外国語をマスターするには、その言葉を話す（その言葉しか話せない）恋人を作るとよい、と言います。会話したい、という動機があるから、必死に勉強します。しかも、その勉強は苦にならないはずですよ。

漢文も、異国の恋人と同じです。

日本語で書かれた本をフル活用して、もっと三国志を好きになる。日本語を駆使して、極められるだけ極める。

すると、ある時点で、

「漢文を読めないと、これ以上、知りたい情報にアクセスできない」という、状況が来ます。

そのとき、必要に迫られれば、漢文に触れたらよいと思います。

三国志への興味が先にあり、その興味が満たすため、漢文が読めるようになる。……というのが、ほんとうの順序だと思えます。

この本では、漢文を読むことを必須としません。むしろ、「漢文を読まなくても、こんなに三国志を学べる」と、実感して頂くことが狙いです。

漢文の参考書を読み返す、レ点を暗記しなおす、というのは、まずは辞めおきましょう。一二〇%、飽きてしまいます。

■ちくま学芸文庫『正史 三国志』

皆さんは、書籍やインターネットを通じて、中国の歴史書に、「正史」というものがあることは、ご存知でしょう。

この言葉は、三国志フアンの日常会話（特殊な状況ですね）や、インターネットで、使い方が混乱しています。特別な思い入れや思い込みで、「正史」という言葉を使う人がいて、ウンザリすることもあります。

ここでは、

陳寿『三国志』は、正史の一つである、
という点だけ、抑えて下さい。

なぜ、「正史」という言葉を出したのか。

陳寿『三国志』は、**ちくま学芸文庫**から、『正史 三国志』と題して、日本語に翻訳され、出版されているからです。全八冊です。

漢文を読めなくても、**翻訳書**だけで、**驚くほど勉強ができます。**

全八冊を新品で購入すると、一万円を超えます。安くはありませんが、基礎資料が、これだけの値段で揃うと思えば、**コスト・パフォーマンスは最高**です。

ちくま学芸文庫の構成は、次のとおりです。

- ・ 一冊目から四冊目が魏の歴史書
- ・ 五冊目のみが蜀の歴史書
- ・ 六冊目から八冊目が呉の歴史書

蜀の分量が少なく不満、という方もいるかも知れません。しかし、原典の陳寿『三国志』でも、蜀は分量が少ないので仕方ありません。

不遇を逆手にとり、**劉備・諸葛亮が好きならば五冊目だけ購入する**、といった奇手を使うこともできます。八冊が、バラ売りされているからです（中国の本は、バラ売りでないことが多い）。

最初から購入せず、図書館で借りても良いのです。興味の深まりと金銭的な余裕に照らし、購入を判断しましょう。私は、学生時代は図書館で借り、就職してから、全八冊を一斉に買いました。

ちくま学芸文庫の『正史 三国志』を読むことが、歴史として三国志を勉強する入口である――。

これは、疑う余地がありません。

ところが、『正史 三国志』を入手しても、**どのように読んだら良いかわからない**、という事態に陥ります。手に取ったことがある方ならば、この戸惑いに、共感して頂けると思います。

日本語ですから、意味が分からないわけではありません。古い翻訳にありがちな、**日本語が壊滅している**、という悲劇は免れています。

むしろ、すらすらと目で追えてしまいます。

しかし、理解できたかと言えば、はなはだ心許ないのです。

歴史書の構成や、記述の規則がよく分からない上に、独特の言葉づかいを濫発され……、早晚、投げ出してしまおうでしょう。

かりに、**驚異的な忍耐力を発揮し、修行の一種と位置づけて、一冊目から八冊目まで通読した**としても……、それで勉強になったかと言えば、残念ながら手ごたえが無いでしょう。そんな苦行は、本職の研究者も、していないはず（明確な目的がある場合を除く）。

だったら、私たちは、どうしたらいいのか……。本書は、この壁を乗り越えることが、主なゴールです。

さきに、想定される「横やり」に反論しておきましょう。

『正史 三國志』は、インターネットで、**誤訳がある**ことが指摘されています。……その通りです。

しかし、人間がミスをゼロにするのは難しく、さらに、**時代も国も異なる言語に置き換える**のですから、ニュアンスにグレーゾーンは付きものです。

大切なのは、

「この翻訳を見る場合と、見ない場合とで、どちらが効率よく、陳寿『三國志』を読むことができるか」という損得勘定です。

あまりにも誤訳が多ければ、「この翻訳を見ないほうが、読解が抄る」ということになります。おおむね正しければ、「この翻訳を見たほうが、読解が抄る」という判断ができます。

幸い、『正史 三國志』は、**これを見たほうが読解が抄ります**。

完全無欠を願うばかり、先人の成果を無視するほうが、非効率であると言えましょう。自分でやってみると分かりますが、おおむね正しい翻訳を作るというのは、難事業なのです。

応用編になりますが、誤訳を探すことも勉強になります。

先人のミスを補うことは、有意義な営みです。

ミスを見つけたら、**どこが、どのように、なぜ誤りである(と、自分が考える)か**を、他人も検証できる形で提示しましょう。三國志という分野への貢献となります。

もつとも、先人のミスの訂正は応用編です。とりあえず、私たちが目標にする所ではありません。

■この本を作成した動機

つねづね私は、**歴史として三國志を学ぶとき、その方法が開示されておらず、敷居が高い**ことに課題を感じてきました。

私は、大阪大学の文学部で(中国史ではありませんが)歴史学を学び、**三國志学会**の会員として、機関誌『**三國志研究**』に、論文を掲載して頂いています。二〇一七年現在、五本、掲載されました。

三國志を学ぶ楽しさを、もつと共有したいと思っています。

そういう思いから、研究職(大学教員)ではありませんが、**三國志研究会(全国版・愛知版、愛知版は私が主催)**で、歴史の学び方、資料の読み方をレクチャーしています。研究会で「今の講義内容を本にしてほしい」というご要望を頂いたので、この本の企画が生まれました。

大学院生の方から、「一般向けの、やさしい入門書があれば良いのに」という意見を聞くこともあります。

* * *

三國志学会(監修)、渡邊義浩(著)、『**三國志研究入門**』(日外アソシエーツ、二〇〇七年)という本があります。

渡邊先生の本は、本文の冒頭(一〇頁)で、早くも、

学術論文の投稿

を目標に設定しています。独学で論文を書き上げられたら、素晴らしいのですが……、難しいでしょう。

私は、大学で歴史学を学んだので、『三國志研究入門』を活用し、三國志の論文を書くことができました。しかし、特殊な例でしょう。

『三國志研究入門』のノウハウは、多くの人にとって再現性が乏しい（同じことができる人が、稀まばらである）という、問題点があるようです。

皆さんは、いきなり「論文を書いてみよう」と言われても、困ってしまうかも知れません。

「論文執筆までは求めていない。しかし、一般書では満足できない。方法があるならば、もっと三國志が勉強したい」という辺りではないでしょうか。

本書は、『三國志研究入門』入門のような位置づけも持たせ、一般書以上、専門書未満の読者を想定し、三國志を独学する方法を、できるだけ平易に解説しました。

論文を書くのは、まだまだ先でいいのです。論文なんて、書いても書かなくても、どちらでもいいのです。

まず、陳寿『三國志』を読む。そして楽しむ。

それから先のことは、考えなくても良いではありませんか。論文を作ることを意識して、いたずらに不安になっても仕方ありません。

反対に、論文を書くというゴールがあるとしても、陳寿『三國志』を読むことが、必須の手順です。これ以外に方法はありません。

論文を目指すにせよ、目指さぬにせよ、未定であるにせよ、本書は、歴史として三國志を学ぶためのノウハウをまとめています。

巻末付録を、ふたつ作りました。

一つは、司馬光『資治通鑑考異』の日本語訳です。

司馬光とは誰か、どんな本か、どういう使い方をするのかは、本文で解説しています。二〇一七年冬の時点で、既存の書籍・インターネットで、翻訳を入手できない資料です。

もう一つは、講演会の記録です。

二〇一七年九月、三國志学会の講演会（京都）で、「私はなぜ三國志を研究するに至ったか？」

と題して、私が一時間ほど話したことを掲載しました。

大学に残って研究者になる予定がない大学生、すでに大学を卒業した一般の方々に向け、「非職業研究者」の立場から、三國志を研究することの意味をお伝えしました。

あわせて、参考にして頂けましたら幸いです。

第一章 赤壁の戦い(上)

陳寿『三国志』武帝紀

本書は、**三国志を独りで学ぶためのガイド**です。

勉強は、陳寿が編纂した歴史書、『三国志』を読むことに尽きます。手始めに、陳寿のことを確認しておきましょう。

陳寿の伝記は、『**晋書**』**卷八十二 陳寿伝**と、『**華陽国志**』**卷十一 後賢志 陳寿の条**に載っています。

『晋書』は、七世紀に編纂された歴史書です。司馬懿の子孫が建国した晋王朝（西晋・東晋）を扱っています。陳寿は西晋に仕えました。晋代の**歴史家の一員**として、『晋書』に伝記が設けられました。

『華陽国志』は、四世紀に編纂された地理書で、益州の地理・歴史が書かれています。**地域が輩出した人物**として、陳寿の記録があるのです。

『晋書』と『華陽国志』という成立時期・内容が異なる書物に、それぞれ伝記が載っており、内容が一致しない箇所もあります。**矛盾した記述もあります**。

「正しい」**陳寿の生涯を描くことは、容易ではありません**。

徐々に明らかにしていきますが、歴史書は、宗教の聖典のように、信仰す

べきものではありません。

記述に矛盾があれば、そこから目を背けず、自分の目と頭で検証し、より妥当だと思われる**史実**（歴史書に記された過去の**事実**）を、つかみ取っていく**ものです**。

三国志ファンにとってお馴染みの**陳寿の生涯**からして、このように困難が伴うのです。

…歴史の勉強って、「**こういうもの**」なんです。

本書は、「三国志の史実とは、〇〇である」という**答え**を、まるで高校教科書のように羅列しません。

歴史書を読み、問いを立てて、検証するためのノウハウを、身につけて頂くことを目的としています。**大学の文学部などで歴史学を専攻すると、初めに習う内容**にあたります。

とは言え、陳寿の生涯を検証していると、なかなか『三国志』を読み始めることができません。渡邊義浩『三国志事典』（大修館書店、二〇一七年）の十六〜十七頁に基づいて、生涯を概観しておきます。

■陳寿の生涯

陳寿は、益州巴西郡の安漢県に人です。字を承祚といいます。

『晋書』陳寿伝によれば、西晋の惠帝の元康七（二九七）年、六十五歳で

死にました。蜀の劉禪の建興十一（二三三）年の生まれと分かります。生まれたのは、諸葛亮が死んだ前の年です。

同郡の（出身地の郡が同じ）譙周から教えを受けました。譙周は、『三国志』巻四十二に列伝があります。

つまり陳寿は、自分の学問の師の伝記を書いて、載せたことになりました。譙周伝によると、譙周は、諸葛亮が五丈原で陣没したとき、禁令が出る前に持ち場を離れ、弔問に赴いたそうです。

陳寿は、『尚書』や春秋三伝を修め、歴史書として評価が高い『漢書』に加え、譙周の影響で『史記』にも精通しました。

蜀に仕えた陳寿は、東觀秘書郎（『華陽国志』）、觀閣令史（『晋書』）の職に就きました。史書の編纂を職務とした官職です。陳寿の官職は、資料によつて違いがあります。

蜀が滅亡すると、西晋に仕え、諸葛亮の文集である『諸葛氏集』を編纂しました。

西晋の武帝・司馬炎は、『諸葛氏集』を、高く評価しました。これには、政治的な理由がありました。諸葛亮を評価することは、彼の侵攻を防いだ司馬懿（司馬炎の祖父）を顕彰することに繋がるからです。西晋の王朝の側に、このような事情があったので、もと蜀の官僚の陳寿は、『三国志』の執筆をすることができました。

呉が平定されると、魏・呉・蜀の三国の歴史書を合わせて、『三国志』を著しました（『華陽国志』）。ゼロから書いたのではなく、魏の歴史は、魚鱗『魏略』と、王沈『魏書』に、呉の歴史は、韋昭『呉書』に基づきました。

蜀には原典の歴史書がなく、陳寿が自ら著したと考えられます。

完成した『三国志』は、張華に評価され、「晋書を任せたい」と言われました。杜預にも認められました。

『晋書』と『華陽国志』とで記述が一致しませんが、張華・杜預に、推薦されたことは共通しています。この二名は、学問的に陳寿に近いだけでなく、西晋の中国統一に力を尽くした人物でもありました。

『三国志』は、魏を正統とする（魏を天下の支配者と認定する）歴史書です。しかし、魏から帝位を奪った西晋を擁護しています。たとえば、魏を守るために、司馬氏（晋）に抵抗した諸葛誕らを、逆臣（裏切り者）として扱っています。

史書のなかの整合性よりも、西晋という王朝と、張華・杜預への人脈的な配慮を優先した作りと言えるかも知れません。

ただし、いくら配慮をしても、当事者の子や孫が生きている時期に歴史書をまとめるという仕事は、軋轢を免れませんでした。官僚としての陳寿は、不遇だったとされています。

『三国志』は、三国時代が終わった直後に作られたという点で、価値があります。時の流れにより、記憶・記録が風化する前に、書き留められたからです。陳寿は、魏・呉の王朝で、リアルタイムに作成された歴史書を参照できました。蜀に至っては、陳寿その人が、かつて国家の歴史を編纂するポストにいました。

反面、時代が近いため、政治的な配慮を強いられました。不都合な事実を隠し、解釈をねじ曲げることが、無数にあったと想定せざるを得ません。

* * *

陳寿の情報は、以上です。

ここからは、実際に資料を読み、三国志を学ぶためのノウハウを紹介していきます。文の意味をなぞって終わりではなく、**歴史を学ぶためのノウハウを、どんどん挿入します。**

「脱線してばかりだ」

と思われるかも知れませんが、その脱線こそ、この本のエッセンスですから、お付き合い下さい。

陳寿『三国志』の日本語訳である、**ちくま学芸文庫『正史 三国志』**を使いこなすことが、**最初の目標**です。

韋編三絶
いへんさんぜつ

という言葉があります。

『史記』巻四十七 孔子世家こうしせいかが出典です。孔子は、熱心に『易経』を読んだので、**書を束ねている紐が、三回も切れたという逸話**です。熱心に書物を読むことを指すようです。

ちくま学芸文庫『正史 三国志』が壊れるまで、読みたいものです。

■『三国志』巻一 武帝紀

三国志のハイライトは、赤壁の戦いです。

赤壁を扱った作品は、多くあります。映画『レッドクリフ』(二〇〇八、二〇〇九年)は、赤壁の戦いの物語でした。

小説や漫画、映画などを通じ、歴史に興味を持ったとします。『レッドクリフ』上映の前後は、さまざまな関連本・雑誌が出版されました。今日でも入手可能なものがあります。

それらの解説を読むと、次第に物足りなくなるでしょう。

「赤壁の戦いは、実際はどうであったか」

「**歴史書で、赤壁の戦いはどのように書かれているか**」と知りたくなってきました。

正史は、**紀伝体**きでんたいというスタイルで書かれています。

紀伝体は、**本紀**ほんぎ(皇帝の年代記)と、**列伝**りてん(臣下の伝記)から成ります。

記事を探すとき、**本紀(年代記)を見るのが正攻法**です。本紀は、歴史書のなかで、**背骨**の役目を果たします。

赤壁の戦いは、建安十三年(二〇八)年です。『三国志』巻一 **武帝紀**ぶていき(曹操の年代記)が、この年をカバーしています。

ちよつと補足をしましょう。

小中学校で学ぶ歴史教科書は、「平安時代」、「鎌倉時代」といった、時代の区切りを軸として、章を区切ります。年表は、「西暦〇〇年」という年数を軸として、表が組まれます。

歴史を書くとき、**時系列の指標**(軸・背骨)が必要です。

指標は、何でも構いません。絶対に正しい指標、誰もが賛同する指標、誰

もが使うべき指標というものはありません。

何を指標に選んだかにより、書き手の「歴史に対する見方」が明らかになります。もつと言えば、オリジナルな指標を使うことによって、独自の歴史の見方を主張できます。

例えば、皆さんが自分史を書くときとします。

人生をいくつかに分割して、「章」を立てなければいけません。

何を指標として、分割するか。

年齢（十代、二十代）は、有力です。人生の節目で引越したなら、住んでいた場所で区切れるでしょう。属した組織、影響を受けた人によって、区切れるかも知れません。大きな病気やケガを経験し、人生観が変わったならば、独立した「章」が書けそうです。

年齢の指標は、「〇世紀」という歴史のまとめ方に対応します。引越しは、奈良時代、平安時代、という、都の位置による区切りに似ています。組織や人による区切りは、鎌倉時代、室町時代など、権利者の移り変わりによる区切りに似ています。

病気やケガの時期は、（日本の）戦国時代に似ています。

歴史（年代記）を書くときの指標は、恣意的な（書き手の都合で、自由に設定できる）ものなのです。

中国の歴史書の一形式である**正史の指標（軸）は、皇帝です。**

曹操は皇帝に即位していませんが、陳寿は、「**武皇帝**」という皇帝として扱いました。

子の曹丕（**文皇帝**）が、父の死後、**遼**って帝号を贈ったからです。

『三国志』を読みこなすため、**本紀（年代記）の何巻が、西暦の何年に当たるか、知っておきましょう。**

皇帝は、年末に死ぬと決まっていますから、バトンタッチの年には、重複があります。

巻一 武帝紀（曹操） 〇二二〇年

巻二 文帝紀（曹丕） 二二〇〇〜二二六六年

巻三 明帝紀（曹叡） 二二六〇〜二二九九年

巻四 三少帝紀（曹芳・曹髦・曹奂） 二二九〇〜二二六五年

曹操が死去した建安二十五（二二〇〇）年の正月までが、武帝紀のカバーする範囲です。

終わりは明確ですが、始まりが曖昧です。

武帝紀は、曹操の祖先のことから語り起こしますが、最初に年号が現れるのは「**光和の末**」で、西暦一八四年です。これより前、曹操が若い頃のエピソードが書かれますが、年代記の役割は果たしていません。

詳しい方ならピンと来ると思いますが、西暦一八四年は、**黄巾の乱**が起きた年です。さらに詳しい方は、「黄巾の乱は、**中平元年**ではないか」と疑問を持つことでしょう。

光和七（一八四）年、黄巾の乱が起きましたが、年内に鎮圧され、**十二月に、「光和七年」から「中平元年」に年号が変更（改元）**されました。「光和の末」と「中平元年」は、同じ年なんです。

改元は、年代記にとつて重要な事です。しかし、武帝紀に、改元の記載がありません。ひとつ前の時代を扱った、**正史『後漢書』本紀八 靈帝紀**を見なければ分かりません。

特定の王朝について記す歴史書は、時代の境目の扱いが難しいのです。

連続した時間のなかで起きたことを、どこかで区切らなければ、書物として完成しません。

特定の時代を扱った歴史書を「**断代史**」と呼びます。『三国志』もタイトルどおり、三国時代を扱った断代史です。

武帝紀が年代記としての機能を果たすのは、**初平元（一九〇）年以後**と考えられます。曹操の活動が、時代のメインストリーム（董卓との戦い）と合わさった時期です。

なお、西暦一九〇年代は、『後漢書』でも取り扱われており、『三国志』と重複します。

『三国志』と『後漢書』の重複した記事を比べて違いを探すと、発見があります。例えば荀彧は、『後漢書』にも『三国志』にも列伝（伝記）がありますが、人物像が異なります。本書の第三章から第五章は、荀彧伝を素材として、歴史書の比較を行う予定です。

ちくま学芸文庫『正史 三国志』の翻訳に拠って、武帝紀の建安十三年をチェックします（ルビは引用元を基本とし、改行は引用者による）。

十三年（二〇八）、……秋七月、公は劉表征討に南方へ赴いた。八月、劉表が死去し、その子の劉琮が代わって襄陽に駐屯し、劉備が樊に駐屯した。

九月、公が新野に到着すると、劉琮はけつきよく降伏し、劉備は夏口に逃走した。公は江陵に軍を進め、荊州の官民に布告を下し、彼らとともに過去を洗い流し、新たに出発することを宣言した。そこで荊州を服従させた功績を判定し、十五人を列侯とし、劉表の大将文聘を江夏の太守にとりたてて旧来の兵を指揮させ、荊州の名士韓嵩・鄧羲らをとりにて任用した。

益州の牧劉璋がはじめて役夫の徴集を受け入れて、兵を派遣して軍に提供した。

十二月、孫権が劉備に味方して合肥を攻撃した。公は江陵から劉備征討に出撃し、巴丘まで赴き、張憲を派遣して合肥を救助させた。孫権は張憲が来ると聞くと逃走した。

公は赤壁に到着し、劉備と戦ったが負けいくさとなった。そのとき疫病が大流行し、官吏士卒の多数が死んだ。そこで軍をひきあげて帰還した。劉備はかくて荊州管下の江南の諸郡を支配することとなった。

『正史 三国志』1、武帝紀、六七頁

「公」は、曹操のことです。曹操は、出世魚ではありませんが、年代が進むと、資料のなかでの呼び方が変化します。

初めは「**太祖**」と、廟号（死後に、廟で祭られるときの名）で書かれます。建安元（一九六）年、献帝を奉戴し、大將軍の官職に任命されてから、「公」となります。敬称の一つですし、三公の「公」かも知れません。建安

十八（二一三）年、曹操は、魏公の爵位を受けますが、呼び方は代わりません。建安二十一（二一五）年、魏王の爵位を受けると、「王」となり、最期までそのままです。

呼称はさておき、引用した武帝紀を読んでみて、いかがでしょうか。

「赤壁の戦いのプロセスが、よく分かった」

「物語で手に汗握った場面を、歴史書でも確認できた」

という感想を持つことは、正直、難しいでしょう。情報が足りず、散らかっており、これを読んだだけでは腹に落ちなかったと思います。

つぎの一手が必要です。

■正史『三国志』裴松之注

武帝紀には、裴松之（三七二～四五二）の注釈が付いています。注釈が、赤壁の戦いについて補っているので、読まずには居られません。

……が、読む前に、注釈について説明しましょう。

裴松之の注釈には、さまざまな目的があります。思いつきで、何でもかんでも、情報をくっつけたのではありません。

どのような意図をもって、注釈が作られたか。

裴松之自身のコメントがありますから、本人に聞いてみましょう。括弧のなかは引用者が補いました。改行も引用者によります。裴松之曰く、

（陳）寿の書物は、……欠点は簡略すぎることにあり、ときには脱漏している場合もあります。……さかのぼって旧聞を捜し求め、あまねく逸聞を拾い集めました。……

記録は錯雑としており、どうしても矛盾多きを免れません。（陳）寿が記載しなかった事柄のうち、記録に残したほうが妥当なものは、すべて取り入れてその欠漏を補いました。

同一の事件を記しながら（陳）寿の文と乖離がある場合、同じ事柄と思われる記事が別の場所に出てきて、どちらが正しいか判断できない場合がありますが、いずれも注内に抄録して異聞に備えました。

もし誤謬が歴然としていたり、記述が論理に合わなかったりする場合には、まちがいを示し訂正してその虚妄を懲戒しました。……事件の当否と（陳）寿の過失については、いささか愚見を示し論弁いたしました。

『正史 三国志』 8、一九八頁

右の文章は、『三国志注』を「上表」というタイトルで、ちくま学芸文庫の最終巻（八冊目）に載っています。

私たちの感覚では、このように全体に影響がある断り書きは、最初に載せてほしいので、不親切に感じられます。しかし、中国で出版されている『三国志』の原文（中華書局、一九五九年）でも末尾にあります。日本語訳は、これに従っているのです。

ポイントは、この裴松之の上表（当時の皇帝である、南朝宋の文帝に提出したときのコメント）が、日本語訳で読めることです。漢文が読めないことがネックではなく、最終巻にこのような文があることに気づかないのが、

学習のネックとなるのです。

最初から順番に読んでいくという方法は、『三国志』の勉強では得策ではない、という一例です。

裴松之の自己申告によると、陳寿の記述が簡潔すぎるときは、補足しました。陳寿が載せなかったことも、妥当に思われることは、拾って書き留めました。どちらが正しいか分からないときは、両方を載せました。明らかな誤りは、訂正しました。

裴松之は、陳寿の文を、それ以外の資料と比較したのです。

より確からしい事実に近づくため、**記述の適否を検討し**、その成果を残してくれました。

今日の歴史学の手法（「史料批判」と言います）に通じます。

もしも裴松之が**陳寿の文を削除し**、**書き換えて上書きしたならば**、検討のポイントが、分からなくなつたでしょう。

裴松之は、陳寿の文を保存した上で、**引用元の書名を示して引用**したり、引用した箇所と区別して、**自分なりの意見**を書いています。

……ときどき、どの書物の引用か、どこからが裴松之のコメントか、切れ目が分からないこともあります。ほぼ区別が付きません。

以上、裴松之の注釈について、解説しました。赤壁の戦いについて裴松之が武帝紀に引用した資料を、読み進めましょう。

■武帝紀の注釈『山陽公載記』（上）

『山陽公載記』にいう。公は軍船を劉備のために焼かれ、軍をひきい、華容の街道を通り、徒歩でひきあげたが、泥濘にぶつかり、道路は不通であった。そのうえ大風が吹いた。弱兵全員に草を背負わせて泥濘を埋めさせ、騎兵は、やつと通ることができた。弱兵は人や馬に踏みつけられ、泥の中に落ちこみ、非常に多くの死者を出した。軍が脱出したのち、公はたいそう喜んだ。諸将がわけを訊ねると、公はいった、「劉備はわしと同等じゃが、ただ計略を考えつくのが少しおそい。さきにはやく火を放てば、わしらは全滅だったろう」と。劉備はその後、やはり火を放つたが、まにあわなかった。

孫盛の『異同評』にいう。『呉志』を調べると、劉備が先に公の軍を撃ち破り、そのあとで孫権が合肥を攻撃している。ところがここでは孫権が先に合肥を攻撃し、後から赤壁の戦いがあったと記している。両者は異なっているが、『呉志』のほうが正しい。

『正史 三国志』1、武帝紀注、六九〇七〇頁

これが、裴松之が武帝紀に付けた注釈です。いくつも気になる点があるので、順番に消化していきましょう。

『山陽公載記』孫盛の『異同評』、『呉志』と、立て続けに、二重カギ括弧に囲われた、固有名詞が登場しました。

これは、裴松之が参照した**本の名前**です。

元来の漢文には、カギ括弧はついていませんが、翻訳者が「本の名前であ

る」と判断して、付けてくれたものです。二重カギ括弧がついていれば、**本の名前と認識できます**（会話文中の会話文などを除く）。

ちくま学芸文庫は、八冊目に、**裴松之が引用した本**について、解説がついています。

さきほど見た裴松之のコメント『**三国志注**』を**上る表**が翻訳されていたのも、八冊目でした。

蜀ファンは、蜀の歴史が書かれた、五冊目だけを買えばいい……、という考えもありますが、**資料編**として八冊目には有用です。

八冊目は、半分以上が資料編なのです。

二九六頁以降が、「**裴松之注引用書目**」です。裴松之が注釈に引用した本の目録、という意味です。

五十音順になっており、『山陽公載記』は、「サ」の項です。

山陽公載記 樂資撰

隋志によれば、十卷。山陽公は後漢の献帝が魏の文帝に讓位したあとの称号。裴松之は、袁暉の『献帝春秋』とともに、「穢雜虚謬」と批判する。載記は、地方の覇者の事跡を記す場合に使われる語であり、献帝にふさわしくない。樂資は晋の人。

『正史三国志』8、三二一頁

言葉が難しく、面食らったかも知れません。

裴松之が、『**山陽公載記**』の**信憑性を疑っていた**ことが、分かります。裴松之は疑いつつも、この本を完全にウソとは断定できず、後世の読者（私たち）に情報を提供するべく、引用してくれました。

曹操が泥のなかを敗走し、劉備の追跡の甘さに救われた——というエピソードは、裴松之のサジ加減で、後世に伝わったのです。

ちくま学芸文庫の解説を、説明します。

「樂資撰」は、樂資という人が編纂した書物だ、という意味。姓は樂、名は資です。「撰」は、名前の一部ではありません。

解説者は、どうして樂資が「晋の人」と分かったか。これは、「**隋志によれば**」という部分と関連します。

隋という王朝を扱った歴史書は、『隋書』です。

『隋書』は、隋の滅亡後、七世紀に唐で成立しました。隋は、聖徳太子が小野妹子を派遣した、あの隋です。

『隋書』には、経籍志という、『隋書』の編纂時に知られていた本のリストが載っています。編纂時、もう本文が残っておらず、書名や作成者、巻数だけしか伝わっていない場合にも、貪欲にリスト化されています。

『隋書』卷三十三 経籍志二 雜史に、

春秋後伝、三十一卷、晋著作郎樂資撰。

山陽公載記、十卷、樂資撰。

とあります。晋で著作郎という官職についてた樂資という人物がいて、『春秋後伝』という全三十一巻の本と、『山陽公載記』という全十巻の本を編纂した人物であると分かります。

晋は、三国時代のつぎの時代で、司馬懿の子孫の王朝です。

楽資は、晋の仕え、著作郎（国の歴史の記述を担当する）になったようです。楽資の情報、これ以上ありません。著作郎は、われらが陳寿も、晋において就いた官職でした。

「隋志によれば、十卷」、楽資は「晋の人」という解説は、『隋書』経籍志に基づくと分かりました。

「山陽公」は、後漢の献帝が、皇帝の位を曹丕（曹操の子）に譲ったあと、魏王朝から与えられた爵位です。

「袁暉の『献帝春秋』とともに……」は、何のことでしょうか。

どこかで裴松之は、『献帝春秋』が信頼できないと述べたようです。

どのようなコメントでしょうか。

手掛かりが少ないので、『正史 三国志』を初めから終わりまで通読しないと、見つけられません。解説者が勘違いして、誤って『献帝春秋』を引きあいにしている可能性もあります。念のために確認が必要です。

……

答えは、『三国志』巻三十六 馬超伝ばちょうで、裴松之が注釈した文です。馬超は、あの蜀に仕えた馬超です。

『正史 三国志』をひたすら読めば、馬超伝において、裴松之のコメントを見つけることができるでしょう。労力が甚大ですが、不可能な方法ではありません。

(つづく)

試し読みは以上です。

佐藤大朗ひろ『三国志独学ガイド―正史三国志のつぎに読む本―』は、B5版、全二二六ページです（試し読みは、一四ページ途中まで）

通販をしています。

本体価格三〇〇〇円＋送料三〇〇円（税込）

メール：hiro_sato0906@yahoo.co.jp

もしくは、

ツイッター：@Hiro_SatoH

にご連絡ください。

宜しくお願いいたします。